

論 文 要 旨

“半山”作家林海音の主婦像—台湾と北京・日本を漂泊した家庭

天神 裕子

本稿は、“半山”作家林海音の散文に描かれた主婦像について分析し、1920年代から1950年代にかけて中国大陸と台湾に跨り形成・発信された、一知識人女性の家庭観の意味を考察するものである。“半山”とは、日本の植民地時代に大陸に居住し、光復後台湾へ戻った台湾籍の人々を指す。林海音は1918年に日本の大阪に生まれ、1923年に両親とともに北京に渡り、光復（祖国復帰）後の1948年に再び台湾へ渡った。その作品には一貫して女性・家庭という題材が好んで用いられているが、本稿ではそこに林自身の分身のように度々出現する“自己肯定感の強い近代主婦”像に注目する。大陸反攻の旗印のもと、文学が政治と緊密に結びつけられようとした1950年代の台湾で、林海音はなぜこのような主婦像を描いたのか。

国民党の遷台に伴い、林海音と同様に多数の女性作家が台湾でデビューした。大陸時代に五四文化運動の洗礼を受けたとされるこれらの“遷台女性作家”は、日本語／台湾語の使用が禁止された当時の文壇において、日本時代の女性作家にとって代わり、家庭・女性に関する多数の作品を発表する。大陸から台湾という“異郷”への漂泊が、知識人女性—多くは主婦で母親でもある—の描く主婦像に、どのような影響をもたらしたのかという問題は興味深い。とりわけ、“半山”というプロフィールをもつ林海音の主婦像の形成には、他の遷台女性作家とは異なる、より複雑なファクターが含まれていたことが推測できる。

このような問題意識に基づき、本稿ではまず、林海音をはじめ遷台女性作家の多くが作品発表の場とした『中央日報』「婦女與家庭」欄から、謝冰瑩、惠香、林海音、孟瑤、鍾梅音、艾雯を中心にその言説を分析した。そこには、主婦は家庭の主宰者であり、主体性をもって幸せな家庭を築く存在であることが提示され、仕事と家事の二重負担に対する問題提起もみられた。夫婦と子どもで構成される“小家庭”において、内助の功を果たしつつ一定の経済力を持ち、主体的に家庭を営む主婦像は、中国の近代化により誕生した“近代家族の良妻賢母”像と重なる。またこれは国民党政府の主導による“反共抗ソ”の政策のもとでの、有能で幸福な“自由中国”の主婦像とも通ずる部分があった。このうち、林海音と鍾梅音の文章には、良妻賢母への肯定感が顕著にあらわれていた。本稿ではまた“半山”林海音の主婦像形成のプロセスと比較するために、“唐山”（外省人）鍾梅音

の主婦像について分析し、そこに大陸時代の家庭と対極をなす、自由で幸福な台湾の“小家庭”が描かれていたことを明らかにした。多くの遷台女性作家にとって、遷台とは新天地の“小家庭”を形成するきっかけとなったのである。

これに比較して、“半山”林海音の主婦像の形成は、中国の近代化にともなう近代家族の受容という点では遷台作家と同様であるが、日本の台湾植民地化によりもたらされた台湾人としての微妙な立場、日本の中国大陸侵略にともなう故郷への帰還という背景がある点で、より複雑で重層的なものであった。愛情で結ばれた両親による北京という新天地における“小家庭”に端を発し、日中戦争と父の死、経済的に家族を支えた職業婦人としての経験、さらに光復後の“故郷”への帰還によって、台湾において自己実現し女性たちを導こうとする、強い使命感が生まれ、それは家庭を第一に仕事の充実も追求しようとする積極的な主婦像に繋がっていった。遷台当初に林海音が挑んだ故郷の再構築も、揺れるアイデンティティを確たるものとするための自己実現の手段であり、幸せな家庭をもち、忙しく働くこともまた、自己実現への重要なステップだったといえる。そうした意識こそ“自己肯定感の強い”主婦像が形成された大きなファクターとなったということができよう。“半山”という二重のアイデンティティを有する作家林海音が描いたのは、あくまでも積極的で前向きな、より充実した自己をめざす主婦像であり、それは時代のなかで漂泊した家庭を介し形成されたものであった。